

サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤り (17)

サンクチュアリ教会は、真のお父様のみ言と伝統が真のお母様によって覆されていると主張し、お母様のなさることをことごとく否定しています。それらの主張は、お父様がお母様と共に立ててこられた勝利圏を否定するものであり、真の父母様を中心とする統一家の一体化を損ねるものです。以下、サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤りを指摘します。

なお、彼らの言説の誤りを総合的に理解し把握するためには、「真の父母様宣布文サイト (http://trueparents.jp/)」の掲載文や映像をこらなくください。

(教会成長研究院)

注・本文中、真の父母様のみ言および機関誌等に掲載された教会側の主張は「青色」で、サンクチュアリ教会側の主張は「茶色」で色分けしています。

【32】お母様が、お父様の生命維持装置を外して『安楽死』させようとした」という批判への応答

彼らは、亨進様の説教を以下のような文章にして各方面に送りつけています。

サンクチュアリ教会側は、真のお父様が聖母病院に入院しておられるとき(二〇一二年八月十三日〜三十一日)、「真のお母様と幹部らは、お父様の生命維持装置を外して『安楽死させた』と考え、安楽死をさせようとしたとき、亨進様と国進様が命懸けでそれを阻止したのだ」と述べ、真のお母様を「殺人者」であるかのように批判します。

「私達は、病院で大きな戦いをしながら、お父様を安楽死させようとした時、『どうかどうか、オモニがされたら殺人者になります。メシアの殺人者になります』と言うと、たたかれ、顔をたたかれました。私を！ オモニムが私をたたかれたのです。説得、説得、説得してから私達を呼びました。パク

ボヒー、イジェソク、キムヨンヒ、ヤンチャンシク、ソクジュンホ、キムヒヨウル、キムヒヨナム。彼らと呼んでオモニムは一人一人皆に聞きました。『私がアボニムを解放したい』と、『生命維持装置』外したい』と、『唇の色が変わっている』と、朴晋照<sup>パクジン</sup>だけ反対しました。……ところが、他のこの偽り者達が、詐欺屋達がグーの音も言わず、自分のメシアが寝台に横たわっておられた時、全世界に『食口に祈禱せよ』と私(亨進様)が全世界にそのメモ公文を送った時、皆が精誠をし、祈禱をし、何、禁食をしている時、一人も言わない。だからオモニムが最後に私を見て、また国進様を見て話しなさいと言うから、私たちははつきりと言ったのです。そうされたら殺人者になります。五十年して来られた全ての内容を、歴史はオモニムを殺人者として見ます」

真のお父様の主治医の同意を得て『トゥデイズ・ワールド ジャパン』二〇一二年陽曆十月十日号に公表された石俊溟<sup>シムン</sup>韓国会長(当時)の「真のお父様の『摂理的闘病路程』」の報告(以下、「石氏の報告」)では、ご入院から十六日目の八月二十八日、聖母病院とソウル大学校病院の呼吸器系統の韓国最高の医師から「真のお父様の肺機能回復率がほとんど皆無である」(74ページ)と通達され、その日の午後、金榮輝<sup>キムヨンフイ</sup>氏、朴晋熙<sup>パクジンヒ</sup>氏、李載錫<sup>イチャク</sup>氏、石俊溟<sup>シムン</sup>氏らが集まり会議を行ったとあります。

①教会成長研究院の二〇一六年二月二十八日の映像での反論について

教会成長研究院は、病室に居合わせた看護師、病室を訪ねた幹部らの証言、そして亨進様をはじめサンクチュアリ教会側の主張を総合し、二〇一六年二月

二十八日の映像「真のお母様の生涯とサンクチュアリ教会問題」で次のように反論しました。

お母様がお父様に対してこのように復讐心を持っていたとは知りませんでした

「(八月十三日)聖母病院に移送されたとき、医者から『到着が三十分遅れていれば難しかった』と言われました。肺機能は低下し、腎臓機能は停止、すでに回復は不可能であると診断されました。……お母様はお父様の苦痛を察し、そのようなお姿で延命されることを願われるお父様なのだろうか」と苦悩され、生命維持装置を取ることも考えられました。

しかし、亨進様、國進様にとつては、そのような姿が誤解する決定的な事件になってしまったのです。亨進様は(二〇一五年九月十三日の説教で)次のように語られました。

『お母様は五十年間この謎を隠していました。私たちはお母様が痛みや恨みを持っていることを知っていました。しかし、

このように語っていますが、夫を苦痛から解放してさしあげたいと願うことが『復讐』となるのでしょうか？ この亨進様の批判は、真の父母様が育まれた夫婦愛、妻の持つ『烈』の心情世界が分らずに完全に誤解している状況ではないでしょうか。真のお母様は、『清平<sup>チョンピョン</sup>で三日以上過ごして霊界に行かなければ』と語られ、救急車を改造され、清平に聖母病院と同じ設備を準備して移され、八月三十一日午後七時に真のお父様が到着されました。そのとき、お父様が目でお母様を捜され、お母様は『お父様、家に帰ってきましたよ。家に帰ったのでいいでしょう?』と語られました。するとお父様が涙を流されました。まなざしと手で、ふたりだけで深い対話の時間が持たれました。九月二日、真の家庭が集まり、

お父様の好きな歌を歌い、手足をもまれました。夕方から血圧、脈拍数が落ちていき……四日目の九月三日午前一時五十四分、お母様と共に『サランヘ・アボニム』を歌い、見送る中で聖和されました。それから、すぐお母様は医療装置を外すように指示されました(「真のお母様の生涯とサンクチュアリ教会問題」の映像から)

上述の「お母様はお父様の苦痛を察し、そのようなお姿で延命されることを願われるお父様なのだろうか」と苦悩され、生命維持装置を取ることも考えられました」という部分は、亨進様の説教情報を正しいものと仮定したうえで述べたものでした。しかし、正確な情報は主治医の情報です。

②治療を行った日本人医師の証言、および「真のお父様の摂理的闘病路程」の報告に基づく応答

聖母病院の主治医以外に、真のお父様の治療を担当した日本人医師にW医師とA医師、T医師の三人がいます。W医師にインタビューし、正確な情報を確認しました。

W医師の証言を簡潔に述べると、以下ようになります。

「八月十六日、清心病院<sup>チョンシン</sup>の医師から電話で『DIC(播種性血管内凝固症候群)に対し日本から援助できる治療法はないか』と問い合わせがあり、日本にしかないリコモジュリンという薬の投与が効くと伝え、それをすぐ準備し清平に届けたが、聖母病院の医師からは『その対象ではない』とのことで、投与は見送られた。その後、清心病院の医師から二十五日と二十七日に電話があり、『お母様が、日本から呼吸器科と腎臓、透析の専門家を連れてきてほしい。今の仕事を置いて、半年から一年来てほしい』と言っておられる」との連絡であった。半年から一年、

韓国に行くのは大変なことであるが、短期でも行ってお母様の願いにお応えしようと、W医師とA医師は二十九日、T医師は三十日に訪韓した。

W医師は二十九日朝、韓国に到着。聖母病院の主治医に会って病状を聞くと『もう長くない状態です』と説明を受けた。お父様は手足を動かし、時々目を開けておられた。しかし、W医師が瞳孔に光を当てると、対光反射は認められ、痛み刺激に顔をしかめるような反応はあったが、昏睡で意識がない状態であられた(JCSⅢ-200の状態、JCS:ジャパン・ユーマ・スケール)。医師でない、看護師や病室を訪ねた関係者を見ると、回復を強く願う思いも手伝ってか、お父様はまだ意識があり、回復するかもしれないと思えたかもしれない。しかし専門の立場から見れば、すでに昏睡で意識がない状態で、極めて重篤であられた。この証言は、『トゥデイズ・

てみたりもしました。ところが……韓国最高の医師たちの結論は……お父様の肺機能回復率がほとんど皆無であるという、呆然とする現実……八月二十八日のことでした。一人お部屋に入られて、限りなく慟哭される真のお母様……午後、私たちは会議を持ちました。参席者は金榮輝、朴普熙、李載錫、石俊溟、訓母様、金孝律、そして真のご家庭の代表として文國進様と文亨進様。この八人で真のお母様に待り深刻な会議をしました。……どのようになれば真のお父様に少しでも地上で長く待ることができ、少しでも楽に生きてあげて(霊界に)行かれるようにできるかを深刻に考え議論しました。……『どんなことがあっても、真のお父様のお体を保護しなければなりません』という(お母様の)み言でした」

八月二十八日の通達があった翌日、W医師は聖母病院に到

ワールドジャパン』掲載の「石氏の報告」と一致します。前述したように、石氏の報告には、八月二十八日に韓国最高の医師から「真のお父様の肺機能回復率がほとんど皆無」と通達されたとありますが、W医師が「対光反射」を見ると意識がなく、それは「ほとんど皆無」という通達を裏づけるものでした。W医師が真のお父様のお体を確認すると、生命維持装置で血圧、脈数は安定しておられたが、手足の末端は血行障害を起こし、血の気がない状態であられたといっています。

この情報は、「石氏の報告」と一致します。その報告は次のようになっています。

「八月三日、聖母病院に入院され……肺炎であるという診断を受け……病状は非常に深刻で、敗血症、肺不全により肺に水がたまっていることが判明しました。『絶対安静』が必要だとい

着します。W医師は、真のお母様の「三日以上、清平で過ごさなければならぬ。聖和させてはならない」との願いを受け、主治医が「もう長くない状態」と診断し、意識のない重篤状態で、お母様の願いが可能かどうか深刻になったと証言しています。

教会成長研究院が、前述した映像で「八月三十一日午後七時にお父様が(清平に)到着されました。そのとき、お父様が目でお母様を捜され、お母様は『お父様、家に帰ってきましたよ。家に帰ったのでいいでしょう?』と語られました。するとお父様が涙を流されました」と説明したのは、「お父様が目でお母様を捜され……するとお父様が涙を流された」と証言する人がいたためです。おそらく、それは回復を強く願う思いも手伝い、真のお父様の意識が回復されたと思込んだのであり、W医師によれば、意識のない

う医師からの注意がありました。しかし真のお父様は、天正宮博物館に必ず行かなければならないと強く命じられ、八月十二日に還宮されました。

還宮後には天正宮博物館のあちらこちらを見回し、手を触れながら別れの挨拶をしていらつしやるかのようなお姿でした。真のお母様に侍り、最後の祈禱のような深刻な祈禱もなさいました。『全て成した!』というみ言を一日の間に四回も語られながら、周囲を整理されるお姿もありました。……翌十三日には『……清平団地を見回る』と言われ、清心国際中等高等学校の前まで行ってきたりもされました。しかし午後になると、真のお父様の体力は急激に衰え……お母様は、涙で真のお父様に『病院にまいりましょう』と訴えられました。普段であれば一言で断る真のお父様でしたが、この日は喜んで真のお母様の忠告を受け入れ……清心国際病院

状況でそれはありえないと証言しています。それくらい、実際のお父様のご容体は厳しいものでした。

W医師によると、当時、真のお母様を含め誰もがいかにお父様に地上に長くいていただくかを考えた時期であり、聖母病院で「生命維持装置」を外す論議が出るような状況ではなかつたとのこと。もし装置を外したら、真のお父様は聖母病院で聖和されることになり、「聖和式」の挙行も難しい状況が生じた可能性があったからです。お母様の願いは「何としても生かしてほしい」というものでした。「石氏の報告」と日本人医師の証言は一致しており、これが「真実」と言えます。したがって、真のお母様が、真のお父様のご聖和前に医療装置を外すよう指示された事実はありません。最後までお母様は懸命にお父様に侍られ、お守りされました。お亨進様が語っておられる「お

へ行かれました。清心国際病院で数時間、療養をしていらつしやる間にも真のお父様のご容体はさらに悪くなり……お母様は、直ちに真のお父様のお許しを頂き、再び総合病院であるソウル聖母病院まで真のお父様をお送りしよう命じられました。……聖母病院二〇七号室に入室された真のお父様は、直ちに応急措置を受けられました。夜中でしたが、あちこちから緊急の呼び出しを受けて駆けつけた医師だけでも五、六人、看護師七、八人……その晩十二時が過ぎた頃になって、真のお父様は五階の集中治療室へ移されました。……深夜一時を過ぎてからやつと集中治療室から出てきたチョン博士は、『……あと三十分遅かったら、きょうは大変なことになるところでした』と、真のお母様の知恵深く、素早いご決断に驚いていました。……私たちは、ソウル聖母病院のほかにソウル大学校病院の門をたたい

父様を安楽死させようとした」  
「私たちは……お母様がお父様に対してこのように復讐心を持っていたとは知りませんでした」という発言は、真のお母様に対する反発心から、真のお父様と「最終一体」になっておられるお母様をおとしめ、誤った情報で会員を「真の父母」から離反させようとする「情報操作」のための発言です。私たちは、このような意図的で不正確な情報に惑わされてはなりません。私たちは、真のお父様が生前に語っておられた「先生が霊界に行ったならば、お母様を絶対中心として、絶対的に一つにならなければなりません」とのみ言に従って、天の父母様(神様)とお父様の「夢」を実現させようと最前線に立って奮闘しておられる真のお母様と一体化し、お母様をお支える歩みをしていかなければなりません。それが、お父様の最大の願いでもあるからです。